

氏名：久 米 晋 平

論文題目：李二曲儒学思想の研究

(論文内容の要旨)

本論考は、清初の人李二曲（顥、一六二七～一七〇五、陝西盩厔の人）の学問、即ち儒学思想について考察したものである。

明末期（天啓年間）に生まれ、清初期（順治、康熙年間）を生きた李二曲は、極貧という生活環境に根ざした修学を続け、黄宗羲、孫奇逢と共に「清初三大儒」と目される存在として知られた。本論考では、李二曲という儒学者の学的姿勢と四書解釈に現れる特質を論じ、同時に自らの歩みと志向する儒学とがどのように関わっているのかについて考察した。

本論考は全体を三部に分ける。序論では従来の李二曲像について、第一部では〈学〉の内実について、第二部では四書解釈について論じた。

序論「李二曲について」では、従来、李二曲がいかなる人物として理解されてきたかを確認すべく、『清史稿』所収の「李顥伝」全文を訳出し、さらに伝記資料に基づく略年表を掲出した。その上で、これ迄の李二曲像を支える言動——博学鴻詞の拒絶、「理学」の教導、朱（子）王（陽明）折衷的な学問など——を再検討する必要があることを論じた。

第一部「李二曲の〈学〉」・第一章「修学過程と「悔過自新」」では、李二曲初の著述である「悔過自新説」を材料に、二曲の修学過程との影響関係を踏まえながら、その特徴を論じた。

名のある家系ではなく、特定の師も得られない環境のなか、〈学〉に励んだ李二曲の姿は、早くから知県クラスの人士の認めるところであつたが、修学過程に着目すると、先人の書や風聞を自らの師とし、それらを模範として「小人禽獣の域」（現状）からの脱却を図ろうとし、その到達点が「悔過自新」（自身の過ちを徹底的に反省し、自力で自身を一新する）という手法に結実していることが分かった。この修学過程を具体的に記した書が「悔過自新説」であり、「悔過自新」が李二曲の〈学〉の原型と位置づけ得ることを論じた。

第二章「「観感録」に込められた聖人像」では、李二曲の講学記録である「観感録」を材料に、二曲が志向する聖人像を論じた。

「観感録」は、塩丁（製塩業）出身の王心齋をはじめ、樵夫（木樵）、吏胥（末端の官吏）、窑匠（陶器製作者）、商賈（商人）、農夫、賣油傭（油売り）、戍卒（警備兵）、網巾匠（帽子制作者）といった、士ではない者たちの伝記を抜粋した書である。読者対象は、「類ひ（出自、社会的立場）」によって自らを抑制している者である。「観感録」に収録される者たちに共通するのは、直接、間接を問わず先覚者（先人）の風聞に触れるという経験が「一人一人の心には孔子がいる（箇箇人心有仲尼）」と自覚する機縁となっており、それぞれの立場で志を立て、〈学〉に励み続けた姿勢である。

李二曲のいう聖人とは、自らの良知を発揮すること、即ち〈学〉に志して不断に励む者を指すのであって、家柄や過去は考慮されていない。従って、たとえ士でなくとも〈学〉に励み続ける者は聖人と見なしていることが分かった。また、以上の論理は、取り囲むように講学場に集った農商工賈に自信を与え、参会する高位高官の者たちに自らの行いを回顧させるに効果があったことも論じた。

第三章「「效先覚之所為」をめぐって」では、馮少墟（從吾、一五五六～一六二七）の「效先覚之所為」（先覚者の行為を模倣する）説をめぐり高彙旃（世泰、一六〇七～七七）とのやり取りを収録した「東林書院会語」を材料とし、さらに李二曲の「效先覚之所為」理解も交え、それぞれの特徴を論じた。

李二曲にとって、先覚者（先人）を模範とすることは一貫した姿勢であったが、その場合、単に先覚者の言行に追従するのではなく、本体（自己）の確立に資するか否かという明確な判断基準があった。李二曲にとって馮少墟は、「聖学の要領」を悟る切っ掛けを与えたことに止まらず、本体の確立を重視したという点で格別な先覚者である。しかし、「先覚の為す所に效ふ」という先覚者の言行の模倣を重視した馮少墟説については、必ずしも同意していない。李二曲にとって先覚者の言行の模倣とは、〈学〉の導入段階における工夫（手段）なのであって、本体を確立する手段である。〈学〉をめぐり当代の朱子学者高彙旃とのやり取りの中で、彙旃は朱子の〈敬〉重視の言説を根拠に〈敬〉を〈学〉に措定したのに対し、李二曲が「敬は乃ち工夫にして、本体に非ざるなり」と斥けたのはその証左である。

両者のやり取りが噛み合わなかったのは、高彙旃の判断基準は程朱にあり、李二曲の判断基準は本体にあるという違いに起因することを指摘した。

第四章「〈心〉の確立」では、「天が我に賦与したものうち、まずはその大なるものを

確立せよ」という孟子の言葉に依拠し、〈心〉の確立法を示した「學髓」を論じた。

王陽明の「聖人の学は心学である」（「陸象山先生全集叙」）という発言は、後世の儒学者にとって意識されるものであった。それは自身の心をどう捉えるかという問題に直結するからである。この問題に対する李二曲の答えが「學髓」に提示されていることに着目し、その内容を論じた。

「學髓」は、我々に対して天から賦与されたもののなかでも、まずはその大なる者・〈心〉を確立せよ、という孟子の言葉を具体的に説明した書であり、中でも具体的手法として静的な所作——齋戒・静坐・香——を提示したところに特徴があった。しかし、これらの手法は、あくまでも自らの〈心〉の働きを発揮させるための手段であり、また静と動とは表裏一体の関係であるという思考が前提になっているのであって、この点に禅者の静的工夫との違いを見出していることを論じた。

第五章「明体適用の学」では、李二曲が儒学者の〈学〉として捉える「明体適用」について論じた。

「明体適用」という語は、朱子が提唱した「全体大用」以来の系譜を持つ語であり、儒学者が等しく主張するスローガンである。李二曲は、この語が持つ明体と適用とが表裏一体であるという性質に着目し、「儒者の学は明体適用の学である」と主張した。その背景には、どちらか一方に偏ったまま、儒学者を自任する者が横行していたからである。特に「司牧實鑑」は、明確に為政者を対象とした書であったが、為政者が期待される在り方は「実心」で「実政」を行うこと、即ち明体適用を実践することと主張、その体现者の言行を「明体適用」の理論的根拠として提示していることを論じた。

第二部「李二曲に影響を与えた呂涇野・馮少墟の四書解釈及びその展開」・第一章「呂涇野の『四書因問』」では、呂涇野（栢、一四七九～一五四二）の『四書因問』を材料に、四書解釈に現れる特徴を論じた。

『四書因問』は、朱子『四書集注』を基軸とした注釈書であり、質問者の四書に関わる問に因^〇んで、呂涇野が答えを提示する問答体を採用。通覧すると、質問は種々雑多であり雑駁な印象は否めないが、質問者の疑問解消と四書の読解法とを、「聖人の思い」に依拠して示した跡なのであって、「行を尚^{たづ}ぶ」呂涇野の学的姿勢が顕れている。

『四書因問』に見られる丁寧な解説は、質問者の疑問解消にとどまらず、自らの四書理

解を検証する作業、つまり「善読」という読書姿勢の反映であることを論じた。

第二章「馮少墟の『疑思錄』」では、馮少墟の『疑思錄』を材料に、四書解釈に現れる特徴を論じた。

『疑思錄』は、四書全体に対する注釈書ではなく、四書本文及び『四書集注』に対する信頼を前提とし、読解にあたって生じた疑義を解消する過程を示したものである。例えば、言及のない箇所は、四書本文及び『四書集注』を全面的に理解したという証である。

『疑思錄』に通底する「疑い」という行為は、聖人と凡人とを問わず、万人に具有する「千古不磨の心」に気付くための営為であり、その姿勢を「善読」として重視していたことを論じた。

第三章「李二曲の『四書反身錄』」では、李二曲の『四書反身錄』を材料に、四書解釈に現れる特徴を論じた。

李二曲によれば、四書は「聖人賢人の心を伝える書」であり、四書の内容を「反身實踐」することこそ読書である。四書本文及び『四書集注』の内容を「反身實踐」の材として活用し、読解した跡を記録した書である。四書に対する逐条的な言説ではなく、その文体も長短入り交じっており、体裁上の統一は見出せない。しかし、これが李二曲の自問自答の跡なのである。言及のない箇所は、自問した結果、四書の内容と自身との一致が見られた証であり、詳細な言及をしている箇所は、精確な理解が要請される内容と捉えていた証である。格物に対して、詳細な説明をしているのはその証左である。この姿勢は馮少墟の『疑思錄』を踏襲したものといえる。

李二曲の四書理解は、一見『四書集注』を基軸としているようだが、『四書集注』を踏襲することに力点は置かれていない。あくまでも四書本文をどう「反身實踐」するかという点に主眼がある。李二曲にとって、四書は徹底的な自己検証の材料であり、四書の内容を自身及び実社会に活かそうという姿勢が根幹にあった。この読書姿勢を「善読」と表現して、提唱したことを論じた。

また、李二曲が呂涇野『四書因問』と馮少墟『疑思錄』を特別視したのは、両者に四書を「善読」とするという読書姿勢を評価したからであり、この読書姿勢は『四書反身錄』に通底する主張「反身實踐」として踏襲されていること、また、四書学史にあつては、呂涇野——馮少墟——李二曲という系譜が見出し得ることを指摘した。

「結論」では、これまでの考察をまとめた上で、堯舜禹をはじめとする聖人より孔子に至るまでの〈道〉が、「見て知る」あるいは「聞いて知る」ことによって継承されてきたという孟子の歴史観（『孟子』盡心篇下）に依拠した李二曲の言説を即して、改めてその儒学思想を検証した。すなわち、世道を守り、人心を救う任はわが儒にありとの意識のもと、既に『詩』『書』『禮』『樂』『易』『春秋』は明確であり、学術は整理され、孔子と孟子との間には天子と諸侯ともいうべき盟約があり、さらには宋明諸儒の羽翼があるという現在にあつては、たとえ「見て知る」によらずとも著述により、畏縮することなく、張横渠のいう「天地の為に心を立て、生民の為に命を立て、往聖の為に絶学を継ぎ、万世の為に太平を開く」ことが要請されていると述べて不断の実践を主張する、この姿勢こそが李二曲儒学思想の特質であると結論づけた。